
無敵スライム

算裏 友城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無敵スライム

【Nコード】

N2004X

【作者名】

算裏 友城

【あらすじ】

最弱のモンスターはなんだろう？ その問いかけに人々が声を揃え答えるのは、決まってる、 “スライム” だ。

だが、もしも最弱代表たるスライムが最強の力を持っていたとしたら……。

無敵シリーズ第四弾、無敵スライム、開幕！

第一ゲル 無敵S VS パーティー昇龍のリーダー

この世界において、“最弱モンスター”との烙印を押されているのは如何な存在か？

ある酒場にて一つのパーティーからあがった、ツマミついでの議題である。

彼らはどうやら難所とされるダンジョンを攻略し、上機嫌で打ち上げをしていて初心者語りから派生して来た話らしい。

リーダー格の熊を思わせる隻眼の大男が、“俺の前ではモンスターなど等しく雑魚だ”等と酒のせいもあり大きく出れば、切り込み隊長の剣士が“最弱つつたらボーッつつ立ってるだけのナマケモンキーだろ”と言う。

しかしすかさず賢者が、いや、と否定し“自分的にはウォルオウイプスの類いだ”と述べる。最後に女魔法使いが“デッドリーフに決まってるじゃない”と反論した。

「何言ってんだよお前ら、ナマケモンキーはな、攻撃を受けない限り何もしてこないだろうが！ 急所を一突きだね。間違いなく奴だ！」

「しかしですね、仕損じれば手痛い反撃がありますよ。群れていようものなら中級者と言えどてこずる恐れがあります。その点、初步的な浄化術で簡単に駆逐出来るウォルオウイプスこそ最弱かと」

「オバケ嫌いな人はどうなのよ！ デッドリーフなら、枯れてる

しちよつとした炎で凄く燃えちゃうのよ。アイツでしょ？」

ヒートアップする議論。このまま閉店まで騒がれてもたまらぬリーダーは、まあまあ待て待て、と皆を諫めつつ言う。

「おめえらはな、自分の立場でモノを言い過ぎなんだよ。よく考えてみるや……動きが鈍く、痛えのもなく、群れず、駆逐も容易で魔法もよく効く、そんな雑魚中の雑魚がいるじゃねえか」

「おいおいリーダー、俺は敢えてそいつを避けてたんだぜ？　どんな初心者でもそいつは倒せらあ」

「右に同じく。下手をすれば私の息子でも倒せるでしょうね。因みに今年で六つですが」

「えつ、えつ、何？　そんなの居たっけ？」

未だ気付かぬ勘の悪い魔法使いに、賢者はそつと耳打ちをした。

ああ、と得心のいった表情を浮かべる魔法使い。そして皆はいっせーの、せでモンスター名を叫んだ。

「……スライム！」

と。スライムとは、最早冒険者らにとって周知のお馴染み最弱モンスターである。

大概は大きさにして二十から三十カラム前後（約二十から三十セ

ンチ)、子供の蹴球遊びに使用されるボールよりも一回りから二回り位大きい程。

地方によって違いはあるがゼリー状で非常に軟らかく、海水の様に無色透明に微かに青みを含ませた色合いのモンスターである。

よく、打撃や剣はその性質やイメージから通用しにくい、と言われるが実際には水分を内包している表皮を破ってしまうえば勝手に崩壊する……そんな程度のキングオブザコ。

子供がボール代わりに蹴っていたら死んだ、とかの話も有名でよく聞く。

生まれ変わりたくない生物ランキングでは、恐らくダントツの一位を飾るであろう気の毒な生き物である。

だが……これから先そんな認識が通用しなくなる事を、誰も知らなかった……。

あれは酒場の閉店間際。例の四人パーティーが店から出て宿へと向かっている頃だった。

彼らが宿泊するのは、ガロスの宿。初級冒険者らはテントの中から眺め、中級冒険者は財布を見て諦める、そんな宿である。

賢者に肩を支えられフラフラとおぼつかない足取りで歩く剣士。妙なテンションで奇妙な歌を口ずさみ魔法使い。

そしてリーダーといえば“ちょっと小便に行つて来る”と言い、

あろうことが町外れの草むらへと走って行ってしまったのだ。

これまた陽気に故郷の歌を口ずさみならぬ鼻ずさみ、丁度背高なフレリーフの木の裏へと回り込む。さて、用を足そうかと思ったその時であつた。

ガサツ、と草むらが揺れ動く。

「!？」

が、彼は腐つてもパーティー“昇龍”のリーダーであり、この道二十ウン年のベテランである。

即座に視線を音の方向へ向け、付近に耳をすませ迎撃体勢をとつた。流れる様な一挙一動に隙はない。

物音の正体は直感的にモンスターである、と認識。彼はあれこれと既に思考を巡らせていた。

町のそばだからと完全に油断していた。武器は宿に預けていて手元がない。この辺りならばウルフか、あるいはポイズンスネークか……いずれにしろ素手でやり合えるか？ 酔いが回っているし……。

ガサ、ガサと草むらは不気味に揺れ、敵の接近を伝える。僅かな洩れ灯りを頼りに彼はその方向をじいつ、と凝視した。

それは思つたよりも小さくて……。

「えっ……?」

子供の遊具を二回りも大きくした、球状の、きらきらと僅かな光を弾くボディ。彼は途端に緊張状態から解かれた。

「ナンだよ……スライムじゃねえか！」

大方道に迷ったのか、たまたま街の近くに現れたのだろう。取り立てて珍しい事でもない。

さて正体も分かったところで、一瞬でも自分を恐怖させたちっけなそれを、リーダーは許す事が出来なかった。

そうだ蹴りでもくれてやろう、そう思い再び雑魚を視界に収め……。

（あん？　どこ行つた……？）

しかしスライムは忽然と姿を消した。いや、違う、正確にはリーダーの背後に素早く回り込んでいたのだ。

ベチャアアア！

「ぐう　あああああああああああああああああああああああああああああああああ！？」

パーティー昇龍のリーダー、ブレットに勝利した。

……翌日、ブレットは瀕死の状態で見られ、教会の世話になったという。

彼は、何に襲われたのかを、誰にも語る事はなかった。

第二ゲル 無敵S VS 新人パーティーひまわり（戦士Lv：1 × 2）

「な、なあ、ボクたち だいじょうぶだよな？」

ひまわりの リーダーは いった。

「だ、だいじょうぶさ たびだつまえに かわのよろい をかつ
ただろ？」

ガサツ……

「ひつ モ、モンスター！？」

モンスター スライムがあらわれた

「な、なんだよ スライムじゃないか こんなやつ さつさと…
…」

バシッ！ ピシヤッ！

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああー！？」

パーティーひまわり にしゅうりした。

第五ゲル 無敵S VS なりたて拳士ダベツカ (拳士Lv・4)

「よしっ あといつたいだ あといつたいたおせば ゴールドが
たりて あたらしいグローブ かえる！」

ガサッ……

「きたああああ かねをだせええええ！」

モンスター スライムがあらわれた

「ウソだろっ！？ いっせんにも ならない……」

グバッ！

「う、ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
」

けんしダベツカに しょうりした

第七ゲル 無敵S VS 迷子勇者セイン (勇者Lv.???)

「うーん あくましてんのうを けちらしたはいいんだけど
…ここどこだ?」

ガサツ…

「!? そこだ!」

セインは ドラゴンスライサーを はなつた

ズバツ!

モンスター スライムは まつぶたつになつた

「っと スライムだったのか ごめんな ものすごい さっきを
かんじたから …… って、スライム!? まさか ボクのかきよう
ちかくまで もどつてしまったのか!？」

セインは あわて はしりさつた

ズル…ズル…

ピチュッ…

スライムは くつついて さいせいした

第十ゲル 無敵S VS ベテランパーティー昇龍リーダー ブレッド

(重

スライムがあらわれた

「どりゃあ！」

バシャ……

スライムがあらわれた

「ぬオオオ！」

ベジャ……

「おい ……リーダーさ なんでスライムばっか かってんの？」

「このあいだの いっけんいらいですね」

「あんがにおっちゃん スライムに やられたんだったりしてー」

ガサッ……

スライムが あらわれた

「きさまで ううたいめだ かくこオオ！」

バシィッ！

「ぎゃああああああああああー！？」

ブレッドに しょうりした

「「「リーダー！？」」「」」

「なんだコイツ リーダーを いちげきで！」

「ただの スライムでは ありません ステータスじょうほうが
いっちしない」

「おっちゃんを よくも！」

「くらえええ！」

じゅうけんしは マグナスラッシュを はなつた

「しかたありませんね！」

けんじやは スターライトを しようした

「わがほのおよ てきをやきつくせ！」

ほのおのまほうつかいは プロミネンスを しようした

ビシッ ドカツ ベチャ

「ぐあ ああ……………」

「ばかな……………」

「こんなことって……」

パーティー昇龍に　しょうりした

第十二ゲル 無敵S VS パーティーアサシンアサルトのリーダー

「それじゃ……我らの功績を讃え……乾杯……」

それはまるで、絶望の最中執り行われた最後の晩餐の様であった。

もしくは雰囲気だけなら明日、魔王がやってくる辺境の村のそれだ……パーティー“アサシンアサルト”の打ち上げ会は。

「肉……うまい……」

「魚も……いい……」

ロボットの品評会か、あるいは狂信的儀式……さかも皆の格好が漆黒のコートであったり、深い帽子着用であったり……目と鼻元以外は徹底的に晒していない出で立ちが尚、不気味さを強調していた。

「……この度は……襲撃人数百人……達成……めでたい……」

リーダーのアサシンは、皆に対し虫の羽音程の声でボソボソと言った。

「おめでとう……」

「おめでとう……」

「めでたい……」

残りの仕事人三名が同じく呟く。

「だがしかあし！……ゴホン……ゴメン、興奮し過ぎた……
我々以上に……襲撃を成功させているパーティーは……まだまだ居
るだろう……そこで……明日から……クイクス大陸に……向かう……
……」

「「クイクスに！？……ごめん……キャラ作り、キャラ作り
……」

「我らは……次のランクに……進むべき。それに……ここでは……
……名を知られ過ぎたし……潮時だと思う……」

「確かに……そうだ……」

「俺は……子供に石を……投げられた……」

「まだいい……ワタシは問答無用で……切り掛かれた……」

彼らの言うように、パーティー“アサシンアサルト”の悪名は、
あまりに知られ過ぎてしまった。

基本的な活動といえば、汚い金持つ貴族やぼったくり商人などを
ターゲットに襲撃を繰り返し、金品強奪あるいは暗殺を行うという
内容だ。

だが、それはれっきとした犯罪であるし悪の行いである。無論そ
んな彼らに対しては非難の声の方が大きい。敵の方が遥かに多いの
である。

何故四人が汚名を着てまでこの道を突き進むのか……それは本人ら以外は誰も知り得ない事だろう。

さて、話を戻すが、実は彼らが九十九人目と百人目に選んでしまったターゲット……それがどうやら予想以上の有力者であった為に、名は派手に売れてしまい拳げ句大量の追っ手が投入されてしまったのだ。

そしてリーダーの発言、それは国外逃亡の意味を含んでいる。皆も無論、承知であつたが口には出さなかつた。

「だけど……それでも、それでも、我々は続けなければならぬ！
いつの日か我らの流した血が汗が、清浄なる世界へと繋がらん
事を夢に見ながら！」

「リーダー！ キャラ、キャラ！」

「あ……うん、ごめん……とにかく……打ち上げはここまで……」

「あのだ……」

「まだ一杯しか……」

「いやむしろ一杯も……飲んでないけど……」

「あ……」

打ち上げは再開された。

「他に何……頼む……？」

・

「皆……お腹いっぱいになっただ？」

「うん……」

「はい……」

「ええ……」

「じゃあ……こっそり、帰ろう……さらば……」

「……さらば」「」

四人はそれぞれ別々の方角に消えていった。内、リーダーは北の方角へ茂みに紛れ走り抜けてゆく。

速度を保っているにも関わらず、夜の静寂は乱れもしていない。が、その時だ、背後に何かを感じたのは。

（何か……居る？）

自分の後ろを影のようにへばりつき追って来る何か、確かに居る。

(なら……)

と、リーダーは年寄りの木々に目を付けると、なんと幹を駆け登り、枝のしなりを利用して跳躍。

背高な木々を見下ろしつつ、クナイを取り出すと気配目がけ投てきした。四本四本、計八本のクナイが降り注ぎ、確かにその何かへ二発が命中した。

クルクル回転、その後音なく着地を決めると、リーダーは慎重に着弾地点へと向かった。

転がっているのは亡骸か、あるいは……だが、そこにあったのは、何と切り株であった。

「なっ……か、変わり身だと!？」

ガサッ……

「しまっ……!？」

モンスター スライムがあらわれた

「えっ……?」

ばしいいいいっ!

「きゃああああああああああああああああー!」
「？」

アサシンアサルト リーダー クリスにしょうつりした

第十四ゲル 無敵S VS 速射ちガット (銃士Lv・11)

「ふん どんなモンスターも おれの はやうちには かなわな
いぜ」

ガサッ……

「ん、そこだああ！」

ガットは はやうちを しょうし……

ベチャア！

「な、おれよりはやいだとオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
」

モンスター スライムがあらわれた

ガットに しょうりした

第十五ゲル 無敵S VS パーティー美女とケダモノ (トレジャーハンター

「ちょ、ちよつとまって おいてかないでよ!」

「うるさいな なら そのにもつを へらせよ」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「このにもつは わたしのせんりひんなの ひとつたりとも
ばなせるわけないでしょ!」

「ならあしをひっぱるな はやくあるけ ペースをみだすな」

「なによー!」

「なんだよ!」

バチィッ ベジャッ

「ぎゃあああああああああああああああああああああ
ー!?」

パーティー 美女とケダモノ にしょうつした

「ようしよし レベルもあがつたし これでおまえも りっぱな
ビーストテイマーだ」

「ありがとうございます これでボクも……」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「むっ ちょうどいい あのスライムを なかまにしてみる」

「はい！ えつとまずは エサをなげて……」

バチン！

「うわあああああああああ！？」

「なんだと！？」

ビチャアッ！

「ぐあああああああああああああ！？」

ビーストテイマー師匠と弟子に しょうりした

第十七ゲル 無敵S VS 買い物帰りの少年（一般人）

「はあ はあ はやくかえらないと くらくなっちゃう」

ガサッ……

「うつ……モ、モンスター!？」

モンスター スライムがあらわれた

（モンスターにであつたら しずかに しずかに……）

バサッ！

モンスター ウルフがはいごからきしゅうを しかけてきた

「!？」

ドスッ！

「きやいいいいいいいいいん!？」

モンスター ウルフにしょうりした

ガサッ……

スライムは さつていった

「いたい なにがおきたの……？」

しょうねんは ぼつぜんと たちつくした

ドカツ

「グオオオオオ！」

モンスター ギガベアーにしょうりした

「よし いらいたっせいだ さっさとかえって ほっしゅうにあ
りつくか」

ガサツ……

「ん なんだ？」

モンスター スライムが あらわれた

「スライム……？ よし ついでだし たおしてやる……」

バシィ！

「ぐう あああ！？」

クリフに しょうりした

「う、そだ……おまえは いったい……」

バシィィィッ！

「ぎゃああああああああああああああああああー!?!」

クリフに しょうりした

ああああああー！？「「

パーティー デュアルにしようとした

第二十一ゲル 無敵S VS ベテランパーティー昇龍リーダー ブレッド

「ふう きょうはここで のじゅくだな」

「そうですね テントは わたしが はりましょう」

「ごはんは わたしつくる！ ……ところで リーダーは？」

「あつちで すぶりしてるよ ……よほど くやしかったみたい
だな」

「ふんっ」

ブン

「ふんっ！」

ブン

「はぁあっ！」

ビュン

「うおおおおお！」

ガサッ……

「でたな　そこかあああああ！」

ドスッ！

「ぎゃあああああああああああああああー!?」

パーティー昇龍リーダー　ブレットに　しよつりした

第二十三ゲル 無敵S VS 分かれ道の案内人（Lv・6）

「さあ あなたは みぎとひだり どちらのみにちに いきますか
」？」

「うーん ……みぎだ！ みぎにいく」

「みぎですね では おきをつけて……」

おとこは みぎのみちへと すすんだ

（どちらにすすもつが あのよいき ですね）

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「スライムですか あなたは どちらのみちへ？」

ベチャアツ！

「ぐうあああああああああああああああああああ
あ！？」

あんないにんに しょうりした

スライムは ちよくしんした

「もうおわりか？ チームサファイア」

「ぐ おのれ こんなところで ぜんめつしてしまうのか」

「そうだ せめてやすらかに ……きえてしまえ！」

モンスター レッサーデモンは デスフレイムをしようした

ガサッ……

スライムがあらわ……

ドンッ！

「なっ ス、スライムだと！？ じゃまをするな」

「！？ すきありいい！」

ズバッ！

「ばかな そんなことがあぁ！？」

レッサーデモンに しょうりした

「かった……のか？」

ズドッ！

「ぎゃあああああああ！？」

瀕死パーティー サファイアは 全滅した

第二十七ゲル 無敵S VS 迷子勇者セイン2 (勇者Lv.???)

「いくらあるいても でくちがない ……さては てきのようじ
ゆつか!?!」

ガサツ……

「!?!? あまい そこだ!」

セインは ソニックカッターツヴァイを しようした

ズバアッ!!

モンスター スライムは バラバラになった

「あつ またスライムだったのか ……ものすごい さっきをか
んじたと おもったのに ホントにごめんな」

セインは さきをいそいだ

ズル……ピチ、ピチ……

スライムは くつつきさいせいした

「……………」

スライムは セインのすがたを きおくした

第二十九ゲル 無敵S VS 賞金稼ぎライル（ソードマスターLv・99）

「わたしに かてるわけ ないだろう！」

モンスターの むれにしょうりした

「きわめにきわめた わがけんじゅつ もはや このよに てき
はない！」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「きたな ……スライムのばけもの！」

ライルは ヘイズスライサーを はなつた

ズバッ！

スライムは バラバラになった

「ちがったか ……うわさの むてきスライムとは いったい…
…」

ズルズル……

「むっ？ こいつまだ……」

スライムは メタモルフォーゼを しようした

「なっ……？」

勇者セインススライムが あらわれた

第三十一ゲル 無敵S VS 討伐依頼

【重要依頼】

“スライム”一匹の捕獲、もしくは討伐。

【依頼内容】

上記の通り、スライム一匹の捕獲、もしくは討伐を願います。但し、突然変異体と思しき異常な能力を持つ個体に限ります。出来得る限り生け捕りにし、依頼主の元へ運搬して頂ければ有難いです。

【依頼達成報酬】

捕獲……二千万エン

討伐……五百万エン

【依頼主】

ギルドNo.4649 パーティー昇龍

「おいおい……なんだこの ぼうけんしゃを バカにしたよう

な いらいは」

「しかもパーティー昇龍のいらいだと？ スライムのいつぴきも
たおせないのかよ？」

そのとき ひとりのおとこが ギルドにあらわれた

「ん？ あいつは ライルじゃないか？」

「ほんとだ あのとんさいけんしか …… ボロボロみたいだが
まおうにでも いどんだか？」

「よおライル どうしたおまえらしくねえ だれにやられた？」

「……スライム……」

「えっ ……！？」

「わたしはスライムに まけたんだ！ おいギルドマスター、パ
ーティー昇龍につたえておけ、二千万では わりにあわないとな！」

「な……し、しょうきかライル？」

「ああ、わたしはしょうきだ！ ほかくなんぞも できそうにな
い 五千万だ とうばつに 五千万よういしろ！」

ライルは いつものさけをのみほして でていった

「……おいおいおい どうやらこのいらいは……」

「おおあな らしいな」

ぼっけんしゃらの めのいろが かわった

第三十二ゲル 無敵S VS 女魔王カルミンツァー (魔王Lv.???)

「うふふふ できた」

カルミンツァーは ばらのはなを まんぞくそうにみおろした

「ああ ゆうしゃセインは まだここにこないのかしら ここで
はやく …… かれに会いたいわ」

ガサツ……

「!?!? だれっ!?!」

カルミンツァーは デイメンジョンシュートを しょうした

ぐばあっ!

モンスター スライムは じくうのはざまに たたきこまれ
しょうめつした

「………… スライム? ここまで スライムがいつてきたの? け
いびは いったいなにを…………」

スライムに しょうりした

「な なあ ばけものスライムのとうばつなんて ボくらには
にがおもくない？」

「だいじょうぶさ！ さっきあやしげなみせで でんせつのせい
けん エクスカリバーを ぜんざいさんはたいて かつたじゃない
か」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「きたな くらえっ！」

ブンッ ボキッ！

「えっ お、おれた……？」

「まさか これは……」

ビシッ バシ！

「にせものだあああああああああああああ！」

パーティー パンジーにしょうりした

第三十四ゲル 無敵S VS 扱き使われている村人達（一般人）

「おお スライムがおったぞ みんなのしゅう つかまえるんじゃあ！」

ボタン カチャ

スライムを おりにとらえた

「しかしなんだ スライムなぞつかまえて どうするつつうんじやろ」

「さてなあ おやくにんの かんがえることはわからんわい」

「はたけもたがやさなならねつてのに めいわくなもんだ」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「おい あすこにも スライムがおるで！」

「ああ ええわい もうおりもいっばいだあ」

むらびとらは ひきあげていった

「そっちいったぞ デコ!」

「デコいうな チビ!」

デッコーは アイアンネットを しようした

バサッ

スライムのほかくに せいこうした

「よくやったぞデコ! スライムつかまえてつれてくだけで 五
千万 かるいもんだ」

57

「しかしへんいしゅだとか ……こいつは ただのスライムだろ」

ガサッ……

モンスター スライムがあらわれた

「おっ またでたぞデコ!」

「いいかげんにしろ! おれはデッコーだチビ!」

バサッ

プチッ!

「「えっ……!?!」」

ベシッ バシィ

「「ぎゃあああああああああああこいつだあああああああ
あああ!」」

パーティー デコチビにしようりした

第三十六ゲル 無敵S VS ベテランパーティー昇龍 リーダー ブレッド

ガサッ……

モンスター スライムがあらわれた

「くつくつく……さがしもとめていたよ あれから くんれんをくりかえし かんせいしたわざ とくとみよ！」

ブレッドは スライムキラーを しようした

ストン！

スライムは こっぱみじんになった

「やった ……やった ついにかつたぞオオオ！」

「うーん むにゃ……かつたぞー……」

ブレッドは ゆめをみている

「む？　ぎゃ　あああああああああああああああああ！？」

ゆめのなかで　スライムにはいぼくした

第三十八ゲル 無敵S VS 秀才パーティー マナバヤアタケラア・ヌヴェン

「スライムかー スライムといえば せいそくちはどこになる？」

「だいたいせかいじゅう どこにでもいる それよりもこのばあい スライムのとくせいをしらべる べきだ」

「それこそむいみ へんいしゅと ふつうのこたいの ちがいをしらべるべき」

「まずは あるくべきでは？ ミーティングもいいが それだけでは むいみだ」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「だからだな……」

「ちがう！」

「むいみ！」

「りかいふのう！」

バシバシバシバシ！

「『『『ばかなあああずのうがまけたあああああああ
!?』』』」

秀才パーティー マナバヤアタケラア・ヌヴェント・ケルミニー
スに しょうりした

第三十八ゲル 無敵S VS 秀才パーティー マナバヤアタケラア・ヌヴェン

豆知識

マナバヤアタケラア・ヌヴェント・ケルミーニス

訳……偉大なる高みへと到達せんため常日頃より神の知識に触れ
続ける賢い四人組

因みに略して、マヌケ

第三十九ゲル 無敵S VS 矛盾商人チャック（商人Lv・37）

「このたては すべてのこうげきをふせぎ このほこは あらゆるものをつらぬくよ！」

「なら そのほこで たてをついたら どうなるの？」

「えっ あ あー……」

ガサッ……

モンスター スライムがあらわれた

「どうなるの？ ねえ」

「そ、それは……」

スライムの こうげき

バガン！ ベキッ！

「ああっ さいきょうのたてとほこがこなごなにいいいー！？」

ベシッ！

「「うわあああああああああああああ！？」」「

矛盾商人チャックに しょうりした

第四十ゲル 無敵S VS スライム保護団体（会員 × 3）

「はんたーい はんたーい スライムのらんかくを ゆるすなー
！」

「スライムをほごしろー やばんなぼうけんしゃらに てっつい
をー！」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「おおっスライムだ こわがらなくていい われわれは きみた
ちを ほごしに……」

バシィ！

「ぎゃああああああああああああー！？」

「「かいちよう！？」」

ベシヤ ビタン！

「「うわああああああああああああー！？」」

スライム保護団体に しょうりした

「おねがい わたしもたたかうわ かたきをうたせて!」

「ダメだ きみはてを よこしちゃいけない!」

「どうして!? かたきをうつまで いきろっていつてくれたじやない!」

「あれは……」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「うそつき! わたしは、わたしはっ!」

「ちがう! おれは……」

ビシッ バシィ!

「きやああああああああああ!」?

「ぐわああああああああああ!」?

パーティー ラブアンドピースにしょうりした

第四十三ゲル 無敵S VS パーティー ローンウルフズ (ロック吟遊詩)

「は？ スライムう？ んなもんに きょーみねえし」

「おれたちゃ やりたいことやるだけなんだよ」

「いやでも ほうしゅう五千万だって……」

「「ご、五千万！？ ……なんつーか スライムていま どストライクだし！」」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「「よっしゃ いっちょはでに……」」

ビシッ ガスッ

「「マジでかあああああああああああああ！」」

「ひっ お、おれはなんのかんけいもな……」

ドグッ！

「ひゃあああああああああああ！？」

パーティー ローンウルフズに しょうりした

「なんなのよアンタ！ スカイからはなれなさいよ！」

「えー！なんですかぁー？ もしかしてえー、スカイさんとア
リイさんはぁ そーいうかんけいなんですかぁ？」

「！？ そ、そんなわけないでしょバカぁ！」

「ま、まあまあふたりとも なかよくなかよく……」

「そーですよぁ あたしとスカイさんみたいに なかよくしない
とぉー」

「ッ！ー！ もう知らないっ！ おふたりとも おしあわせに！」

ガサッ……

モンスター スライムがあらわれた

(スカイのバカバカ！ だいつきらい！)

ビシッ！

「きゃあああああああああああああああ！？」
「アライー！？ うおおおおおおお！」

「あつ スカイさん!？」

「アリイは ぼくがまもるんだああ！」

バシン

「うわあああああああああああああああああ!？」

(そうなんだ これがふたりのつよいきずな …… かなわないなあ ホント)

パシィッ!

「きゃあああああああああああああああああ!？」

パーティー アーリースカイにしょうりした

「そつちだぁー！ そつちにおいこんだぞ！」

“ つうしんじょうきようよし りょうかい！ これより ……う
っ、うわあああああああああああああああ！？”

「 なっ！？ どうしたクッキー！ ちっ、レンガよ クッキーが
やられたらしい！」

“ こちらレンガ しゅういにけいかいし ……ぐああああああ
あああああああああ！？”

「 なっ …… もう やられたというのか？ そんなバカな……」

ガサッ……

「！？」

モンスター スライムが……

う うわああああああああああああああああああああ

第四十六ゲル 無敵S VS 復活の神殿の人々

「さいきは ふつかつのいのりを うけるものが ふえてますね」

「そうですね」

ガサツ……

「むっ！？ だれですか！」

モンスター スライムがあらわれた

「なぜモンスターが！？ おいだしてしまえ！」

「まちなさい …… かれはきずついています かいふくのじゅつを」

「しっ しかし モンスターですよ？」

「かけておやりなさい！」

「はい……」

エールは かいふくのじゅつをとええた

スライムは かいふくした

ズルズル……

スライムは でくちへと すすんでいった

「な なぜ……？」

「モンスターにも ころがあります それをわすれてはいけません」

第四十七ゲル 無敵S VS 盲目の美女シーラ (救済者Lv.???)

「アナタは なんなのですか？」

ガサッ……

モンスター スライムがあらわれた

「なんだか すごく かなしそうです」

“……………”

「きかせて あなたのオモイを……」

シーラは ダイブインマインド をしようした

“……………こん……………く……………あい……………ド……………む……………ない……………”

「えっ？ よくきこえない……………？」

バシィ！

スライムの 一っづけき

「きゃっ……………」

スライムは にげだした

「あっ、まって！ ……どうして どうしてなの？ きこえなかったの はじめて……」

「ふううん！ はあああつ！」

月光照らす野原の上で、一人の男がひたすらに剣を振るう。少しでも腕に覚えの有る者ならば分かるだろう、荒れ狂う波にも明確な法則があるのだと。

男の名はブレッド。かつてのパーティー昇龍のリーダーであり、かつて魔王打倒でさえを目標にした男。

だが……そんなものは無価値だったと、彼は言った。

「俺様は……いや俺は、勝ちたい……」

頭を丸坊主にし、何故か片眉を剃り落とし、どうしてか上半身裸で素振りを続ける彼。その鬼気迫る様子は東洋で言うところの赤鬼か閻魔大王か、である。

「ざああ！ だりやああああ！ ……何か用か」

ピタリ、と素振りを突如止めた鬼は言う。

「さつきからずっと、こちらを伺ってるよなあ？ 誰だか知らないが出てこい、相手になるぞ」

ブレッドの指摘した木陰から、それは素直に月の下へと現れた。

「さすがです……パーティー昇龍……リーダー……ブレッド殿」

「女、か。残念だったな、俺はもうリーダーではない。ただの冒険者だ」

「そうでしたか……しかし……パーティーの方は……あなたの帰り……待ってましたが」

ハエがブンブンと頭の周りを回ってるみたいな調子で、女は語る。だがブレッドには、不思議と一言一句がはつきりと響いた。

「では……一つだけ、お聞きしても？」

「内容次第だが」

「……申し遅れましたが、私はアサシンアサルトというパーティーのリーダー、クリスといいます。名前位は知っているでしょう？」

女は顔を覆う覆面を外し、言った。月光があるとはいえ、微かに口元と目元が見えた程度だ。

が、ぶつちやけて言うならば期待通りの美女であった。ブレッドが以前公言していた好みのタイプ、それともピッタリ合致する。

「スライムに関する依頼……あれを出したのはあなた？」

クリスは問う。依頼とは、無論アレの事だ。今世間で話題騒然の

ヤツなのだ。しかしブレットは知らん！ と一喝。更には詳しく教えると言つて来たのである。

「えつと……だから……突然変異スライム討伐で五千万エン、とあなたがリーダーだったパーティーから……依頼が出てるの」

「なんだとおお！？ 馬鹿かあいつらめ…… “パーティー昇龍は無様にもスライム如きにやられてしまいました” と言い触らしてる様なものではないか！」

「まあ、そんな些細なゴタゴタは放置して……」

「些細だと！？ 放置だと！？」

「つまりアナタは、とてつもない素早さと攻撃力、知性までも兼ね備えた化け物スライムに負けたという事だろう？」

「ち、知性があるのかは知らんがそうだ！ 信じられるのか、この惨めで無惨な俺様を！」

「ええ」

「……え？」

「ええ」

「え、ええええ？」

一言どころか一文字。

「私も、そいつにやられたからだ。ただのスライムと変わらない外見だった……」

ガサツ……

「「!?!」」

モンスター スライムがあらわれた

「ほう、噂をすればなんとやら、か。丁度いい……」

ブレットは戦闘態勢に入る。

「……私もだ、私にも戦わせて貰う」

クリスもまた、戦闘態勢を取る。

「引っ込んでろ、アレは俺の怨敵よ」

「なんとやらを、なんとやら、とか言う男は危ない。お前こそ引っ込むがいい」

「……好きにしろ。ただし邪魔はするな」

「お前こそ」 二人は同時に駆け出した。

つづく

この世界において“最強のモンスター”との烙印を押されているのは如何な存在か？

意見様々、異種異論はあろうが大概の人々はこう答えるであろう。

“魔王”と。

「ふふっ、もうちょっと」

天高くそびえ立つ魔王城、その最奥の一室にて魔王と呼ばれる者は密かにほくそ笑んでいた。

魔王“カルミンツアー”である。漆黒の鎧を身に纏い、二本の角は雲を向く。それは代々続く由緒正しき魔王の血統の証だ。

だが魔王とはいえ、れっきとした女でもある。初め女性であるからという理由で魔王候補が乱立しかかった事もあったが、最近はその実力を思い知ったのか異論を唱える者もない。

「……何をなさっておいでです、カルミンツアー様」

「ああ、ドクトル。見て分からない？ 部屋を薔薇の花で埋め尽くそうかと思って、一本一本植えてるのよ」

ドクトル、と呼ばれた白衣の男は、シルエットの約半分を占める程の巨大な頭を揺らし、言う。

「見れば分かります。その様な行為をなさる意味を訪ねていますが」

「それはね、勇者セインの為よ。彼がここへと辿り着いた時こそ、最後の戦い……それをより派手に演出するの。攻撃の度に花びらが散るなんて絵になると思わない？」

「勇者セインですか。貴女は口を開けばそればかりだ。既に悪魔四天王も敗北しました、暗殺でも闇討ちでも行えばいいと考えますが」

「ふうん、ねえドクトル……あなたももつと感情的になりなさいよ。人間でも唯一私の目になつた者、そう、セイン。でも私は魔王だった、許されざる関係、覗く悲劇。それを精一杯飾るのに意味は無いかもしれないけれど、気分は凄く高ぶるの。どちらかが歴史のページになるのは必死、だけどそれが私であれ彼であれ、ただの一枚じゃツマラナイ……アナタに分かつて？」

「理解に苦しみますな」

「ま、いいわ。ちょっと出掛けて来るから」

「また……奴の所ですか」

「野暮はなしにして頂戴。じゃ、留守は任せたわ」

魔王は窓を開け放つ。雷と暗雲と時々強風……背中のコウモリ状な翼を広げ、飛び立った。向かい風を切り裂き推力に変えて。

「……ふん、ヒロイン気取りの小娘が……。私の様な知識を持つ者こそが、王に相応しいのだ……。なあ、わたしの可愛い可愛い……」

ガサツ……

.

勇者セインは、道に迷っていた。なんとか山を二つ越えた、が、仲間とは依然はぐれたままだし、そもそもここがどこか分からない。

「うう……は、腹が、減って……目眩が……」

山を下り始めた頃合いからか、モンスターが一匹たりとも現れなくなつた。現状、モンスターを求めるセイン、理由は人間三大欲求の一つ、食欲。

「く、そ……なんで……モンスターがないんだろう……め、メシ……」

遂に膝が地に付く。景色が暗転しぐにやぐにやにねじれて来た。最早限界か、という時に彼を救つたのは一陣の風だった。

ふわっ、と鼻元を抜ける風。心地よい……肉の香りが！ 風に肉の香りが混じっているではないか！ 鳥か豚かそれともゴブリンかそれともそれとも……この際何の肉でもいい、食べさえすればなんでも構わん！ セインはがばと瞬時に身を起こすなり、弩弓が如く駆け出した。

「メシだあああ！　メシのおお匂いだあああああ！」

ガサツ
...

モンスター
スライムがあらわれ……

「メシ
いい
いい
いい
いい
いい
いい
！」

ゲシツ！

! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ?

スライムに
しょうつした

さて、勇者は凶悪スライムを撃破したことに、気が付かず、匂いの発生源、即ちポツンと建った古びた屋敷に辿り着いた。かなり前に放棄されたのか、外壁のレンガはひび割れ或いは欠け……名も知らぬ植物のツタが絡む。

どう見積もっても、二・三年は人が居なかつたであらう屋敷。しかし空腹勇者は一直線に扉へ向かい、ドンドンと激しくノック！

「すいませえん、誰かつ、誰かいませんか！」

本当は誰かが居ると分かってる。嗅覚刺激がなによりの証拠だ。

「はぁーい……あら、勇者セイン様」

「え？ ……ええええ！？ カルミーさん！？」

そう、勇者と魔王は顔見知りだったのです。

「いただきます！」

セインは りょうりにとびついた

「ふふふっ セインさまたら よほどおなかを すかせていたのですね」

「あつ こ、これはしつれい おみぐるしいところを……」

「いいえ おいしそうにたべられるのは なんだかうれしいですさ、どんどんたべてください」

「あ、ありがとうございます ほんとうにカルミーさんの りょうりはおいしいです！」

たべるセイン ながめるカルミンツァー

「ん！？ カルミーさんがって なにかいる！」

「えっ？ ええ……」

(たしかに ……なにかしら このまがましい けはいは)

ガタッ……

モンスター スライムがあらわれた

「スライム？ ……いや ちがう もっともっとじゃあくな
にかだ」

スライムは メタモルフォーゼを しようした

スライムは ゆうしゃセインの すがたをコピーした

「なんだと!?!」

キーン！ カン！

「くっ こいつ のうりよくまでいつしよなのか!?!」

(たしかに ……あのうとき セインにまさるともおとらない)

「!?!?!」

ばしっ！

セインのつるぎは くれた

「しまった!?!」

スライムの ついげき

「セインは ……やらせない!?!」

カルミンツァーは アブソリュートゼロを しようした

「!?!?!?!?!」

スライムはこおりつき こなごなにくれた

スライムに しようした

「な、なあ おれたち だいじょうぶだよな？」

「だいじょうぶさ しっかりと たんれんをつんできたじゃないか！」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「へっ スライムなんぞ ひとひねりだ！ いくぞ てんちのかまえ！」

「おおっ はじやのかまえ！」

スライムは ようすをみている

「くらえひっさつ てんちいんようあつきめっさつはじきたい
せいとおばんちかいなんかせいじょ、ガリッ……」

ふたりは したをかんた

ビシ バシイ！

「うわあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああん！」

パーティー
タンポポにしようとした

第五十五ゲル 無敵S VS パーティー味噌醤油風味

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ!？」

ビシッ!

「ぐはあああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ!？」

ドスッ!

「なんとおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおお!？」

スライムは しょうりした

「…………くそう ……おれたち なまえすら…………」

べちやつ!

「ぐはあああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ!？」

パーティー味噌醤油風味に しょうりした

第五十六ゲル 無敵S VS 宿屋の受付嬢（一般人）

「いらつしゃいませー！」

ガサツ……

モンスター セインスライムがあらわれた

「おとまりですか？」

セインスライムは うなずいた

「えっと おへやはどちらに……」

チャリチャリン……

セインスライムは 3000エンを しはらった

「あ、ありがとうございます 3000エンということはいっぱんですねー」

セインスライムは うなずいた

「では 303号室です どうぞ」

セインスライムは へやへと いそいだ

（みつけたぞ ゆうしゃセイン……）

こくいのおとは セインスライムの あとをつけていった

第五十七ゲル 無敵S VS 黒衣の復讐者 (デモン・Lv・88)

「ゆうしゃ セインのへやは ここか……」

303号室まえ

「きさまにうけた くつじょく いまこそはらすとき……」

バァン！

「ゆうしゃセイン かぐー！！」

モゾ……

へやのなかには スライムがいた

「なにっ！？ セインはどこだ！」

バシン！

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおお！？」

あくましてんのう デモンカイザーに しょうりした

第五十八ゲル 無数S VS 宿屋の窓ガラス (1250エン)

「なにごとですか いまのひめいはー!?」

303号室に ひとがあつまってきた

「なんだあれ!? モンスターがたおれているぞ あくまだ!」

ガサッ……

「おい あそこにもなにかいる!」

モンスター スライムがあらわれた

「なんでスライムやら あくまが こんなところに……?」

パライイイイン!

スライムは まどガラスを ふんさいした

シュバツ!

スライムは にげだした

「ああっ にげた!」

「まってー せめて ガラスのしゅうりだいをー!」

チャリン

しゅうりだいが
なげこまれた

第五十九ゲル 無敵S VS 隙を伺っていた男マーフィ

(ギャンブラーレイン)

「よし いまだ!」

マーフィは スライムをほかくした

「よっしゃ こんどこそ あたりだろ! ぼうけんしゃを けちらしていたの みてたんだぜ!」

スライムは ていこうしている

「むだだむだだ このかごは キルフハツシャのかごだ おまえにはもったいないレアアイテムさ!」

ガンッ ガンッ!

「さーて いらいぬしのところへ もっていくか!」

ガンッ ガンッ ガンガンガン ガガガガガガ

「うわっ!? いてて おとなしくしてろ!」

スライムは つれていかれた

「よし ここか」

マーフィは パーティー昇龍の ほんきよちにたどりついた

スライムの ていこうはやんでいた

「おい スライムをもってきたぜ こいつこそ まちがいなくほんものだ」

「かくにんさせていただきました …… しんでませんか？」

「なんだと!？」

スライムは ほつかいしている

「ばかな さっきまでは ぴんぴんして……」

マーフィは かごをあけてしまった

ヒュッ バキィッ!

「ぐあああああああああああああああああああああ
あ!？」

マーフィに しょうりした

「まちがない こいつだ このスライムがやつだ！」

パーティー昇龍は さっきだった

「いまはなき おじちゃんのかたき とらせてもらっからね！」

「いや ふつうに ピンピンしてますが？」

「ま、まあともかく かくごしろスライムめ！」

“……………”

スライムは メタモルフォーゼをしようした

パーティー昇龍リーダー ブレッドスライム があらわれた

「「「なにいい!?!」」」

ブレッドスライムは ひっさつのかまえを とった

「ちょっと あれってまんま おっちゃんじゃん わたしむりー」

「いくらにせものとわかっていても……やりにくいですね」

「くそオオオオ なんだってこんなこと!」

スライムは おうぎを はなっ……

「なにしているきさまらー! パーティー昇龍のながくぞ!」

“!?”

「このこえは……」

「もしかして……」

「いや もしかしくなくても……」

「てきをまえに すきをみせるなど おしえたはずだー!」

リーダー ブレッドがあらわれた

「「「リーダー!」」」

「スライムやろう おれがきたからには もつすきにさせん!」

“……………”

ブレットは ひっさつのかまえをとった

つづく

第六十二ゲル 無敵S VS 被害者代表リターンズ 1

「喰らええ、ソードバンカアアアー！」

地を捲り上げ奔る衝撃波。ブレッドの放った一撃により戦いの火蓋は切って落とされた。

ブレッドスライム、略してスラブレはひよいと身を躲すと、本物と同等の大剣、を片手で操った。負けじと剣を正面からぶつけるブレッド。

「ぐぐっ……力比べは不利か、だがな……」

「リーダー、任せろ！」

「応！」

ブレッドは更に力を込め、スライムの両手を、剣を封じる。その隙に背後より戦士ノールの剣撃が強襲。

キーン！

と、金属音。背中目がけ振るった剣は第二の剣、それを持つ第三第四の腕により阻止されていた。背中、肩甲骨下より生えた腕が二本。

「うおっ、なんじゃこりゃあ!？」

「ビビってんじゃねえノール、何でも有りな相手なんざ今更だろ！」

二人の力にびくともしないスラブレ。そこに魔法使いが言う。

「二人とも間に合ったら下がってねー！ ひっさあーっファイヤレイン！」

上空に描かれた巨大な魔方陣。炎魔法使いフェイによる広域殲滅魔法が発動したのだ。一定範囲内へと隕石群が如く火球が降り注ぐ。

「「ちょ、フェイイイイー！」」

どうにか効果範囲から滑り込みで脱出した二人。一方スライムは爆心地に居た。荒れ狂い燃え盛る炎の雨が偽物にヒットする度、姿をグニヤリと溶かし変形させてゆく。

そこに賢者クロルが、術式を完成させた。光が突き出された両手の平に収束してゆく。

「聖なる光よ邪を貫けデバインレイザー！」

焦土と化したその場所へ、三本の光の矢が飛来。人間の型を崩しつつあったスライム本体を確実に穿つ。未だ、ピクピクと敵は動いていた。

「リーダー！」

「いっけえおっちゃん！」

「今です早く！」

メンバーの声が重なった。ブレッドは熱くなりつつある目頭を押さえつつ、四肢に力を込める。

「お前ら……ようし、任せろ！」

地を蹴り上げ、ブレッドは再度……いや、今度こそスライムへと突撃を敢行する。本人の強い感情か、はたまた技か剣がより鈍く光っていた。

と、そこへ彼と足並み揃える者が一人、どこからともなく現れた。直前まで、存在を気付かせないとは流石である。

「私も行かせて貰うぞ、ブレッド」

「クリスカ！？ 無事だったようだな」

「当然だ、奴を倒すまで休む訳にはいかない」

短刀握りしめ走るのは、パーティーアサシンアサルトの元リーダー、クリス。目的は彼女も一緒、スライムの打倒である。

「それはダメだ、トドメは俺がさす！」

「なら競争だ、早い者勝ち」

「それでいい！」

意見はまとまった。

「うオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

二人は吠える、獣の様に。その咆哮に感応したか、スライムは末端に活性化し身体を風船みたいに膨らませてゆく。その外面にはまんべんなくトゲが並ぶ。

針マンボウが膨れっ面を見せているみたいだ。そして、次にその刺々をミサイルの様に飛ばして来た。

襲い来る、ニードルのシャワー。が、二人は最早そんなモノでは止まらなかった。いや、どころか益々加速する。ただの一点、目指すは憎つくきアイツ。

「ぐっあああああああああああ！？」

しかし……クリスが一発のニードルに肩口を貫かれ、その場に崩れる。

「なっ、クリス！？」

そして思わず振り返ったブレット。直撃を受ける、ただし剣にだ。自慢の大剣が杭の様になったニードル直撃により真っ二つに。

後少し、後少しなのに！

「くっ……だが俺にはまだ拳が……」

「ブレットオオ、私のエモノを使えええええええ！」

クリスだ、彼女が最後の力を振り絞り短刀を投げ付ける。一直線に飛び二ードルを躲し、そして見事、ブレットの手中へと納まる。

「恩に着る……スライムよ、トドメだアア！」

尚も飛来する二ードルを避け、くぐり或いは跳ね、そうしてついには彼は間合いに飛び込んだ！

「リーダー！」

「おっちゃん！」

「ボス！」

「ブレッツドオオ！」

[illegible]

「ハアアアああああああああああああああああああ！」

ズバァッ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2004x/>

無敵スライム

2011年12月1日18時50分発行